

第 39 回 日本受精着床学会 学術集会

0 - 76

兵庫, 2021. 07. 15-16

受精障害症例に対する単回及び複数回 Ca イオノフォア処理による出生児予後への影響

井崎顕太, 的場麻里, 幸池明希子, 佐藤学, 井上朋子, 森本義晴
HORAC グランフロント大阪クリニック

<目的> ICSI 施行症例において、受精障害が疑われる場合は Ca イオノフォア処理を行う場合がある。しかし、出生児の予後に関する報告は少ない。本研究では Ca イオノフォア処理胚由来の出生児予後について後方視的に検討した。また、単回処理でも受精率が低い症例に行う複数回処理によって出産に至った 1 症例についても報告する。<方法>2015 年 8 月から 2017 年 12 月の間に新鮮胚または、凍結融解胚 1-2 個の移植を施行し、単児出産に至った未処理胚由来の 42 児、ICSI 後 $10\mu\text{M}$ Ca イオノフォアで 10 分間処理した胚由来 4 児(単回 3 児、複数回 1 児)を対象とし、在胎週数、出生時の体重と身長、1 歳半時の体重と身長および、KIDS 乳幼児発達スケールを用いて 1 歳半での発達を比較検討した。複数回処理は 10 分処理後 20 分洗浄を 6 回施行した。<結果>未処理胚由来の児と処理胚由来の児にて在胎週数(38.9 ± 1.4 vs 37.5 ± 2.6)、出生時の体重と身長(3114.1 ± 398.5 vs $2704.0\pm 683.7\text{g}$, 49.7 ± 2.1 vs $46.6\pm 3.0\text{cm}$)、1 歳半時の体重と身長(10.5 ± 1.1 vs $11.0\pm 1.1\text{kg}$, 80.7 ± 2.7 vs $80.2\pm 1.6\text{cm}$)では有意差は認められなかった。また、KIDS アンケート項目である運動、操作、理解言語、表出言語、概念、対子ども社会性、対成人社会性、しつけ、食事、総合にも有意差は認められなかった。複数回処理によって出産に至った 1 症例でも著しい発達の遅延は認められなかった。<考察>未処理胚由来と処理胚由来における児の出生時、1 歳半時の身体と精神発達において有意差はなかった。今回の検討において Ca イオノフォア単回及び、複数回処理の児への発育に影響は認められなかったが、処理由来胚の症例数は十分とは言えないため、長期的な検討が必要である。